

平成 18 年度岩手県立総合教育センター

中学校 1 年生における早期適応を図る
小・中学校の連携の在り方に関する研究
- 「基礎的情報」の共有とその生かし方をとおして -

(第 1 報)

研究協力校

紫波町立赤石小学校

紫波町立日詰小学校

紫波町立古館小学校

紫波町立紫波第一中学校

岩手県立総合教育センター

教 育 相 談 室
佐 野 真 奈 美

目 次

研究目的	1
研究の方向性	1
研究の年次計画	1
本年度の研究の内容と方法	1
1 研究の目標	1
2 研究の内容と方法	1
3 研究協力校	2
研究結果の分析と考察	2
1 中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方についての基本的な考え方	2
(1) 国や県の実態と取組	2
(2) 引継ぎの重要性	2
(3) 引継ぎのこれまでの問題点	3
(4) 早期適応を図るための小・中学校の連携に「基礎的情報」の共有とその生かし方を工夫する意義	4
2 中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方についての基本構想	5
3 中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方に関する実態調査及び分析・考察	6
(1) 調査の概要	6
(2) 調査結果と分析・考察	7
(3) 「基礎的情報」の共有とそれを生かした小・中学校の連携における推進試案作成上の課題	12
4 「基礎的情報」の共有とその生かし方をとおして中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携 についての推進試案	12
(1) 推進試案作成にあたっての配慮事項	12
(2) 「基礎的情報」を生かした小・中学校の連携の推進試案	13
(3) 「基礎的情報」を盛り込んだ児童個票	14
研究の中間まとめと今後の課題	19
1 研究の中間まとめ	22
2 今後の課題	22
【参考文献】	22

研究目的

学校における教育相談は、児童生徒が学校生活に適応し、他者とのかかわりの中で豊かな人間性や社会性を身に付け、自分の可能性を發揮できるように指導・援助することが大切である。

しかし、中学校1年生においては、複数の小学校から集まる生徒間の人間関係づくりや教科担任制による各担任との人間関係づくり、部活動の顧問や同級生・上級生との人間関係づくりが必要であったり、学習内容の進度や難易度もそれまでとは変わったりするなど、生活環境が大きく変化する。その中で、こうした環境の変化に適応しにくく、不登校や別室登校などの不適応状態を示す生徒も急増している。このことに対して、今までの「小中連絡会」では、指導要録抄本などの資料を用いて小学校の生活状況を伝え中学校側の生徒理解を促進するといった対策を講じてきた。しかし、児童や教師が最も不安に思う学習や人間関係への適応に関する情報提供が不十分であったり、引継ぎの時期や方法等の問題から引継ぎ内容が小学校担任の意図したように伝わらなかったりして、中学校での指導に十分生かされてはいなかったように思われる。

このような状況を改善していくためには、小・中学校間で引き継ぐ情報内容を検討し、児童一人一人に対する学習面や人間関係を中心とする具体的な情報や効果的な指導方法等が盛り込まれた個票の作成を行い、その引継ぎ方と中学校での生かし方を工夫することが必要と考える。

そこでこの研究は、引継ぎにおける「基礎的情報」の共有とその生かし方とおして、中学校1年生の早期適応を図る小・中学校の連携の在り方を明らかにし、学校における教育相談の充実に役立てようとするものである。

研究の方向性

中学校1年生における小・中学校間の連携において、引き継ぐ情報内容を整理・検討した「基礎的情報」を記した個票を作成し、小中連絡会において個票を中心とした段階的な引継ぎと継続的な指導・援助を行えば、早期適応を図ることができるであろう。

研究の年次計画

この研究は、平成18年度から平成19年度にわたる2年次研究である。

第1年次（平成18年度）

中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方に関する基本的な考え方の検討、基本構想の立案、実態調査とその分析・考察、小・中学校の連携において共有する「基礎的情報」の内容の整理・検討、「基礎的情報」を生かした連携の推進試案の作成と実践

第2年次（平成19年度）

中学校1年生における早期適応を図るため小・中学校の連携において共有する「基礎的情報」を生かした連携の推進試案の実践及びその結果の分析・考察、研究のまとめ

本年度の研究の内容と方法

1 研究の目標

中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方に関する基本的な考え方を検討し基本構想を立案するとともに、小・中学校教員の実態調査の分析・考察を基にしながら小・中学校間の連携において共有する「基礎的情報」の内容の整理・検討をし、「基礎的情報」を生かした連携の在り方に関する推進試案の作成と実践を行う。

2 研究の内容と方法

- (1) 小・中学校の連携の在り方に関する基本的な考え方の検討（文献法）
- (2) 小・中学校の連携の在り方に関する基本構想の立案（文献法）

- (3) 小・中学校の連携の在り方に関する実態調査及び分析・考察（調査法）
- (4) 小・中学校の連携における共有する「基本的情報」の推進試案の作成と実践（文献法、調査法）

3 研究協力校

紫波町立赤石小学校、紫波町立日詰小学校、紫波町立古館小学校、紫波町立紫波第一中学校

研究結果の分析と考察

1 中学校 1 年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方についての基本的な考え方

(1) 国や県の実態と取組

国立教育政策研究所生徒指導研究センターは、中学校 1 年生時における不登校急増の背景を探るため、小学校 4 年生時から 6 年生時の遅刻早退も含めた日数や、中学校 1 年生時の月別欠席状況、不登校の態様（きっかけと継続の理由）、当該生徒のおおまかな学力等の調査を行った（2002）。

その中間報告である『中 1 不登校生徒調査』（2003）によると、「不登校児童生徒数は中学校 1 年生時において、小学校 6 年時と比較して約 3 倍になる」、「中学校 1 年で不登校になっている生徒の半数は小学校時に不登校相当の経験があった」とあり、「不登校急増の背景は、実は小学校時にさかのぼって原因を考える必要があること」がわかっている。また、中学校 1 年生での不登校は大きく二つのパターンがあることも指摘された。一つは、「小学校の時分から潜在的だった問題が不登校という形で顕在化したもの」、もう一つは「中学校になって新たに不適応になったもの」である。

さらに、同センター発表の『中 1 不登校の未然防止に取り組むために』（2005）では、前述した調査の追跡結果が報告されており、「中学校の教職員に、小学校時の情報が確実に共有されること」、「担任任せにしない学校体制づくりをすること」、「特に中学校の 4 月から夏休み明けまでの対応に重点を置くこと」が提案され、各都道府県においてはその取組が期待されている。

本県においては、小学校 6 年生の不登校児童数と中学校 1 年生の不登校生徒数の比較は、平成 17 年度調査（2005）で 4.15 倍となっており約 3 倍という全国平均を上回っている。中学校 1 年生での学校不適応傾向の急増は大きな課題で、県教育委員会は「平成 18 年度中 1 ギャップ解消推進事業」を立ちあげ、教育関係者らに委員を委嘱した「対策連絡会議」を行っている。さらに教職員を対象として教育事務所毎の研修会、全県の保護者への啓発を目的としたパンフレットの配布、不登校や不適応傾向のある生徒へのていねいな指導の在り方の模索等、工夫と努力がなされており、中学校 1 年生での不登校急増に対する取組が重点的に行われているところである。

(2) 引継ぎの重要性

中学校 1 年生での不登校の二つのパターンである「小学校の時分から潜在的だった問題が中学校 1 年生になって顕在化したもの」と「中学校になって新たに不適応になったもの」を考えると、前者に対しては小学校との「基本的情報」の共有をとおした早期の取組が必要不可欠であり、後者に対しては中学校での学習や対人関係を中心とする不適応状況の予防的対応が求められる。

本研究のねらいは前者の「小学校の時分から潜在的だった問題が中学校 1 年生になって顕在化したもの」という実態を重要視し、小・中学校間で「基本的情報」を共有し生かすための引継ぎを行うことである。不登校につながる要素を内在している児童については、児童の様子と指導・援助の結果とともに、小学校教員の願いも含めて中学校側に伝えたいと考えている。このとき、不登校などの学校不適応につながる潜在的な問題として小学校の担任が把握できる児童

の様子は、【表1】のようなことが考えられる。

また、先行研究から、不登校児童生徒が新年度に学校復帰をする割合は2割であり、8割の児童生徒の復帰はなかなか難しいことから（埼玉県熊谷市教育委員会の情報提供による、2005）学校不適應の未然防止は先手を打って積極的になされるべきであると考えられる。

さらに「不登校の要因や背景が一つに特定できないことが多い」とされているが（文部科学省調査、2003）、不登校などの学校不適應の背景には学業不振の問題も関わっていることが分かっている（国立教育政策研究所、2003）。

これらから、学校不適應の要因や背景を画一的にとらえるのではなく、中学校においても小学校の見方やとらえ方を生かしながら児童の個別の事情に応じた指導・援助がなされるよう中学校へ引き継ぐ必要がある。

これまでの様々な学校不適應に関連するデータはあるが、未然防止の取組は事後対応の取組に比べて十分には進んでいないのが現状である。その中で小学校6年担任から中学校側へポイントを絞った引継ぎ方を提示することは、中学校1年生における早期適應を図ることにつながり、ひいては学校不適應未然防止につながるものと考えられる。

(3) 引継ぎのこれまでの問題点

研究協力校の小・中学校教員の実態調査からは引継ぎについて、時期及び時間設定、資料及び引継ぎ内容、引継ぎの行われ方、の3点について問題点が指摘された。

ア 時期及び時間設定の問題

現在行われている引継ぎの多くは、「小中連絡会」の名称で毎年中学校卒業式後に設定し、決まった時間内で多くの人数を引き継いでいる。しかしこの時期は小・中学校共に、年度末事務処理や新年度準備に追われ、さらに中学校においては高校進学への対応がまだ続いていることもあり業務が錯綜している状況にある。

そのような中で行われてきた引継ぎの感想は、「一人に要する時間は短時間でも総時間にすると長い」、「時間のないところでの引継ぎに無理を感じている」、「十分な引継ぎができない」、「受ける側にも限界がある」とあり、半数近くの教員が時間の無さについて指摘し（中学校実態調査）多くの児童を一度に短時間で引き継がざるをえない状況にあった。時間と時期の設定を工夫し、特に支援すべき児童や配慮すべき児童については、適切な時間配分をしながら必要な情報共有を図る必要がある。

イ 資料及び引継ぎ内容の問題

現行の引継ぎ資料は、指導要録抄本と学級編成用の資料（例：ピアノが弾ける、リーダー性がある等）であり、その他詳細については口頭で行っている。記載量に多少の差はあるものの、指導要録抄本等の一律的な資料によって引継ぎがなされてきた。また、地区によってはさらに細かな情報や指導経過をまとめた資料を作成している例も見られた。

しかしこれらの資料では、「情報量が少ない」、「小学校によって情報量が異なる」、「情報の重

【表1】学校不適應につながる潜在的な問題として
小学校担任が把握できる児童の様子

出欠席や、授業等への参加状況	<ul style="list-style-type: none"> ・遅刻が多い。 ・保健室へ行く回数が多い。 ・別室登校や登校しぶりの経験がある。 ・体育等の見学が多い。 ・低学力である。 ・提出物を出さない等のルーズさがある。 ・行事に参加しないまたは参加できない。
対人関係での特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・担任の介入がないと自分から友達の輪に入っていけない。 ・「いや」と断ることができない。 ・トラブルが多い。
性格・行動の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・意志決定が遅いまたは決定ができない。（自分できなかな物事を決めることができない） ・内向的で、意思表示しない。 ・予想外のことに対処が困難である。 ・極度に真面目であったり、理想が高すぎたりする。 ・自分から相談することができない。 ・気にしすぎるところがある。（神経質） ・表情がないまたは乏しい。
家族の状況	<ul style="list-style-type: none"> ・家族との不和 ・家庭の教育力が弱い

要度(ランク)がうまく伝えられない」、「小・中学校の教員に生徒の実態のとらえ方にずれが生じる」(中学校実態調査)等、中学校側から引継ぎ内容の不足についての指摘があった。一方、小学校教員からは「必要な情報は伝えたい」としながらも、「余計な先入観を与えることにつながってしまうのではないかと懸念される」(小学校実態調査)と心配の声が聞かれた。このように、小・中学校間で必要な情報量に認識の違いがあったり、口頭で引き継がれたため記載されていない内容があり、中学校1年担任に確実に伝わっていなかったりする例が多々あった。そのため小学校からの指導・援助の連続性が弱まり、中学校1年生の担任は試行錯誤的な指導になったり、生徒の実態にそぐわない指導になったりしがちで、早期適応のために必要な対応が十分図られない可能性は高いと考えられる。

ウ 引継ぎ方の問題

「小中連絡会」の構成メンバーはその地区により多少は異なるものの、小学校6年生担任と中学校3年生担任、それに養護教諭、教務主任や生徒指導担当、教育相談担当、コーディネーター等が適宜加わる。

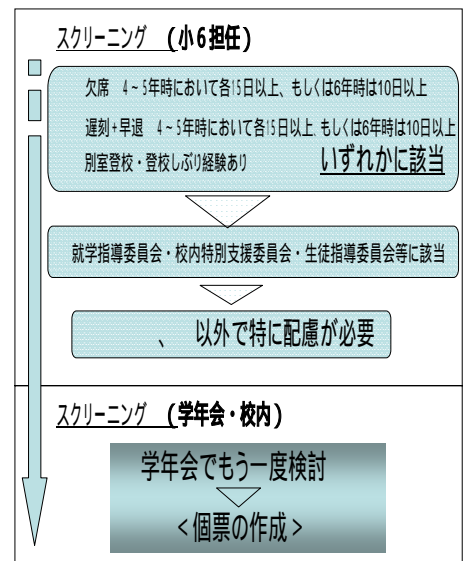
しかし、「あれほど詳しく話し合ったのに(中学校1年生担任に)伝わっていないことが多く残念」(小学校実態調査)という声のように、来年度中学校1年生の担任になるとは限らない教員との引継ぎであるため、小学校側から情報提供された内容が確実に伝えきれているとは言えない面があった。ここにおいて引継ぎ方に対する小・中学校教員の意識の違いを感じるとともに、引継ぎ内容が中学校1年生担任に確実に伝わるようにするための体制を強化する必要がある。

(4) 早期適応を図るための小・中学校の連携に「基礎的情報」

の共有とその生かし方を工夫する意義

ア 中学校1年生における早期適応を図る指導・援助のための「基礎的情報」を共有する意義

本研究では、小学校6年生担任が行うスクリーニングと、その後の小学校内での検討会を経て(【図1】)該当する児童(以下「個票対象者」)について「基礎的情報」を記した個票を作成する。「基礎的情報」とは対人関係や学習状況を中心とした個票対象者の実態や特徴、実際行った指導内容や効果等の情報とし、この「基礎的情報」が盛り込まれている資料を個票と呼ぶ。個票は、不登校などの学校不適応傾向を示す児童、就学指導委員会や校内特別支援委員会や生徒指導委員会対象児童、そして問題行動があって小学校6年生担任から見て特に配慮が必要な児童が対象になる。この個票対象者について小・中学校間で共通理解を図ることを「基礎的情報」の共有とする。



【図1】スクリーニング

こうして 学区内の小中学校の共通理解のもとに作成された個票を使用することによって、次のようなことが期待できる。

- (ア) 学校によって情報量及び内容について、共通理解を図ることができる。
- (イ) 引き継ぐ内容について、的を絞りに限られた時間内でも話し合いを深めることができる。
- (ウ) 中学校での指導をする際のアセスメントをする資料になる。

イ 中学校1年生における早期適応を図る指導・援助のために「基礎的情報」を生かすことの意義

7月から欠席日数が30日を超える生徒が出ること(国立教育政策研究所調査2003)を考慮し本研究において早期とは、1学期を目途にする。また、「基礎的情報」の生かし方とは、個票を中心とした引継ぎ方のこととおさえる。

本研究では、「一人一人についての引継ぎに要する時間が少なく情報量が少ない」(中学校実態調査)「中学校1年生担任に引継ぎ内容が伝わっているのか疑問である」(小学校実態調査)ことを受け、多くの情報を共有することと、その情報が確実に伝わることをねらいとして、引継ぎを2月と3月の2度に分ける。2月の引継ぎは、個票対象者分のみを行う。また3月の引継ぎにおいては、2月に行われなかった全ての児童分を、例年通りの資料と仕方で行う。このように分けることで、配慮すべき生徒にも余裕をもって指導の手立てを講じることができ、生徒が入学してくるその日から指導・援助方針をもって指導にあたることができる。

そして5月の小中連絡会では、小学校の旧6年担任が中学校1年生となった生徒の授業を参観した後、新担任と個票を軸としての話し合いを展開し生徒理解を深めることとなる。

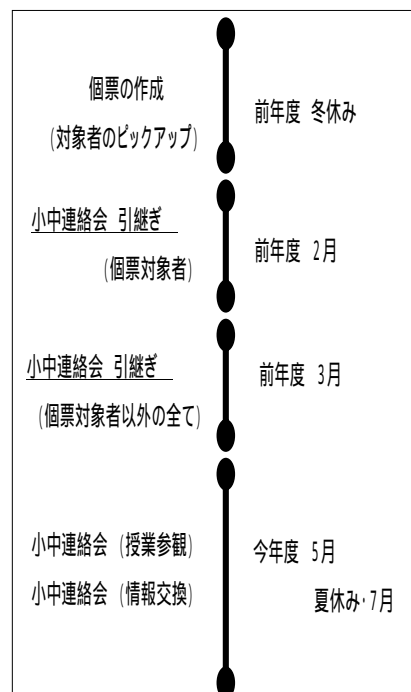
以上のように、配慮すべき生徒については小・中学校間が「基礎的情報」を共有することによって、中学校1年生担任が入学当初からの指導に役立てることができ、場合によっては小学校側から再度情報収集し新たな指導の手立てを講じることができる。

こうして、夏休み期間に計画する小中連絡会においての小・中学校間の情報交換で、引継ぎの完了とする。

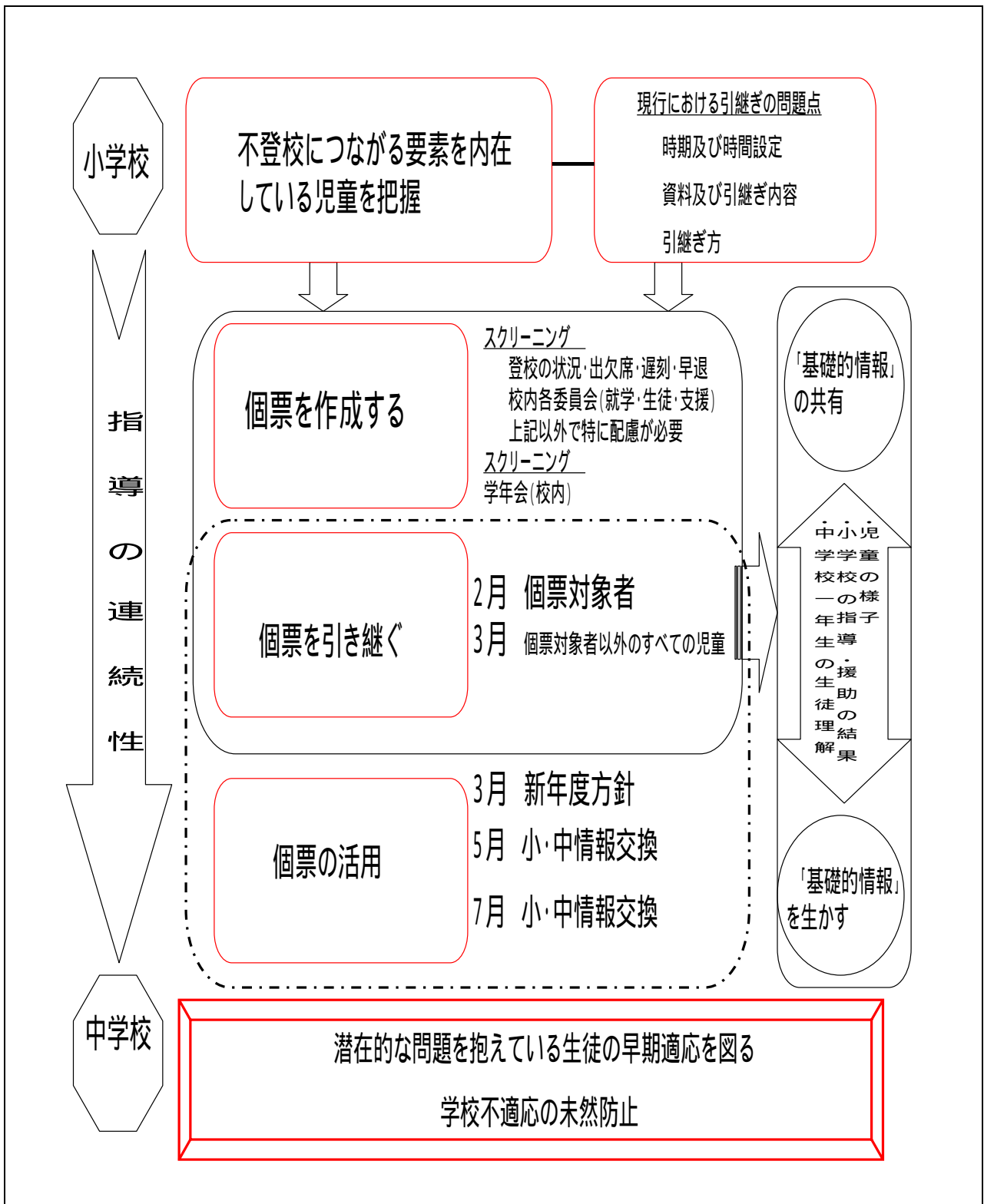
これら一連を年間計画の中に位置付け実践することによって(【図2】)、小・中学校間において共有された「基礎的情報」を生かし学校不適応傾向を示すことが心配される中学校1年生への、早期発見や早期対処が可能となることが期待される。

2 中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方についての基本構想

これまで述べてきた基本的な考え方を基に、中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方に関する基本構想図を【図3】のように作成した。



【図2】引継ぎの計画



【図3】中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方に関する基本構想図

3 中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方に関する実態調査及び分析・考察

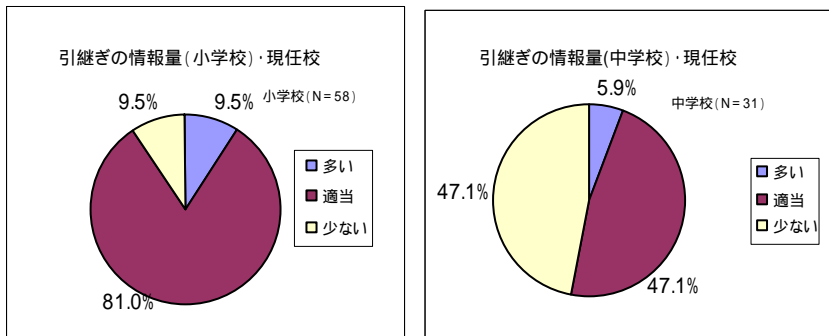
(1) 調査の概要

児童生徒が小学校から中学校へ進学する際、継続的な指導を行うため、また小・中学校の教職員間でどのように連携をしていけばよいのかを探るために、引継ぎを中心にした実態調査を行った。(調査紙は、20頁【資料4】【資料5】参照)

【表2】実態調査の概要

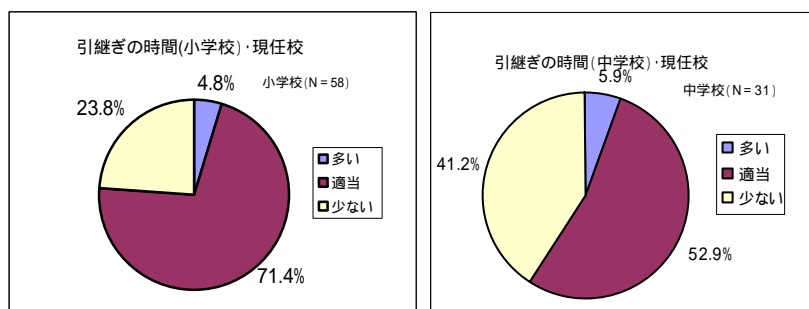
小学校 教員(人)	中学校 教員(人)	小・中学校 合計(人)	調査期間	調査方法
58	31	89	平成18年 7/22~8/1	・ 研究担当者が調査用紙を作成し、各校の教員に実施

(2) 調査結果と分析・考察



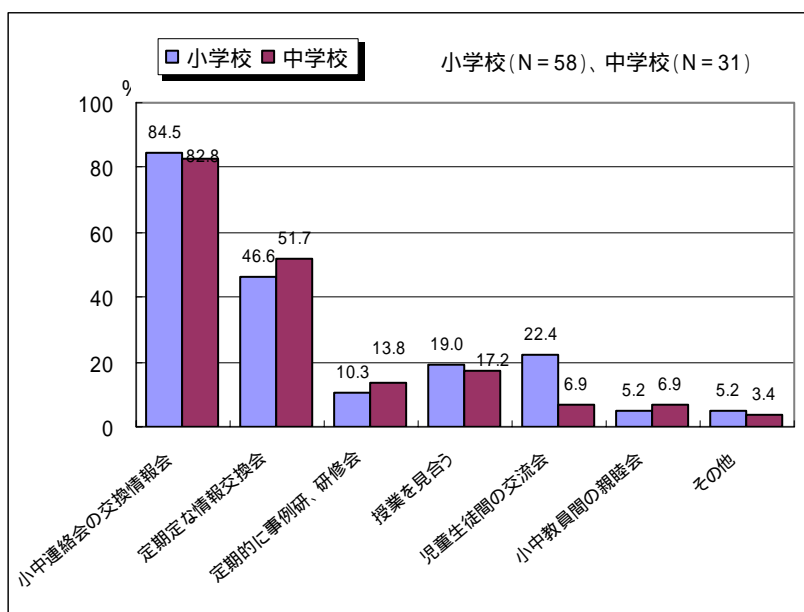
【図4】 現任校における引継の情報量

【図4】は、現任校における小学校から中学校へ引き継がれる情報量に対する感じ方を示したものである。小学校は多くが「適当」（81.0%）と感じ、中学校は「適当」、「少ない」と感じている率が同数（47.1%）だった。小学校教員が思うほど中学校教員は情報量に満足していない。



【図5】 現任校における引継ぎにかかる時間

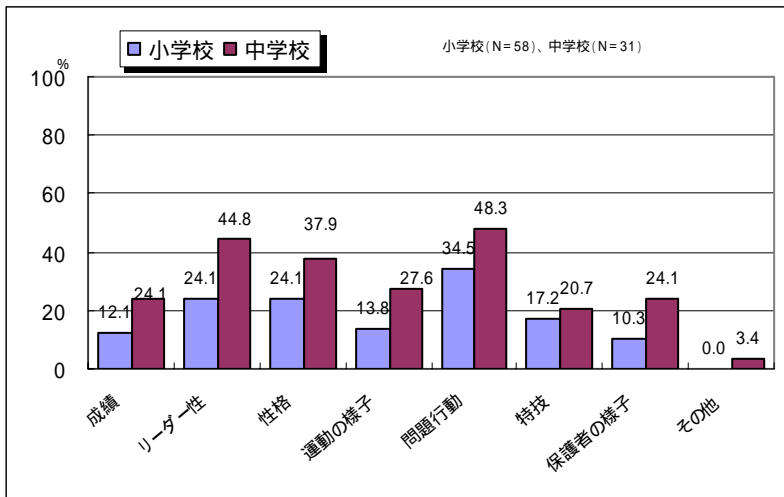
【図5】は、現任校における小学校から中学校へ引継ぎにかかる時間に対する感じ方について示したものである。小学校は71.4%、中学校は53%が「適当」と回答している。一方、中学校で「時間が少ない」と感じているのは41.2%で少なくない。



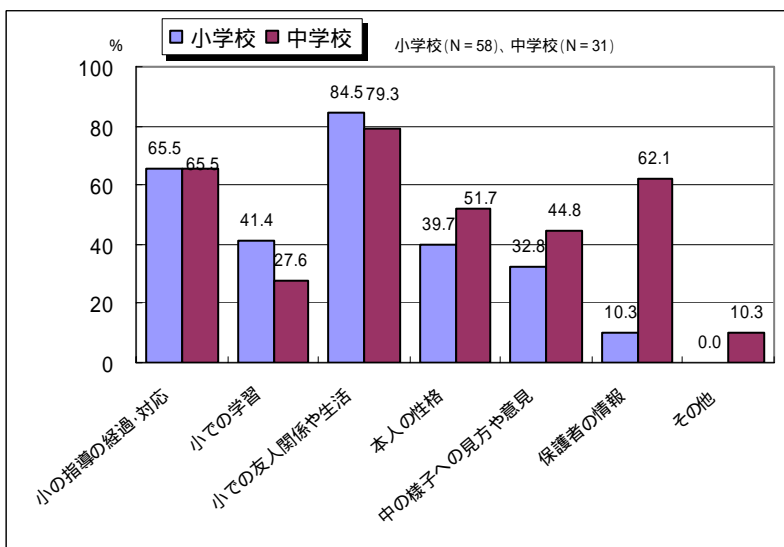
【図6】 小中連携に必要な場面

【図6】は、小中学校教員間でどのような場面での連携が必要かを示したものである。小・中学校共、「小中連絡会の交換情報会」（小学校84.5%、中学校82.8%）を選択している。これは、現在行われている小中連絡会の在り方を検討し、充実させることが求められていると考える。また小学校教員は「児童生徒間の交流会」の回答が多かった（小学校22.4%）。授業参観や何らかの行事において児童生徒同士が交流する場を必要と感じている。

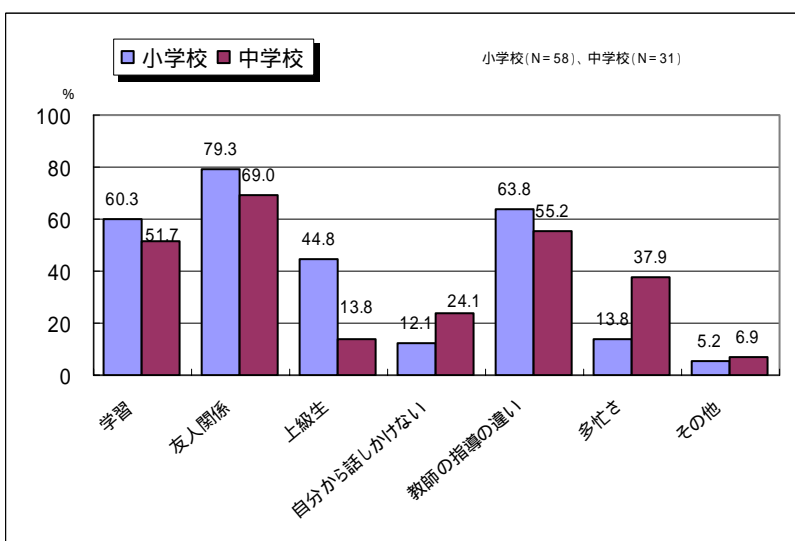
【図7】は、指導要録抄本の情報以外にほしい情報は何かを示したものである。ここでは、中学校の回答率が小学校より全項目において高い。これは、小学校教員が思っているよりも、中学校では生徒に関する



【図7】指導要録抄本以外にほしい情報



【図8】5月の小中連絡会で話したいこと



【図9】中1生徒の不適応の要因

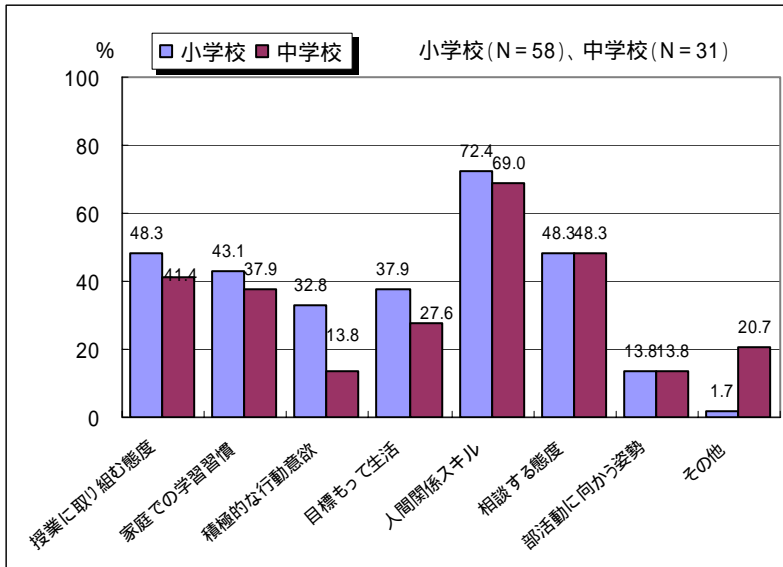
る様々な情報を求めていると考えられる。

中学校は回答率が高い順に「問題行動」(48.3%)、「リーダー性」(44.8%)、「性格」(37.9%)をあげている。「保護者の様子」(小学校10.3%、中学校24.1%)の小・中学校間の差が大きいのも特徴的である。

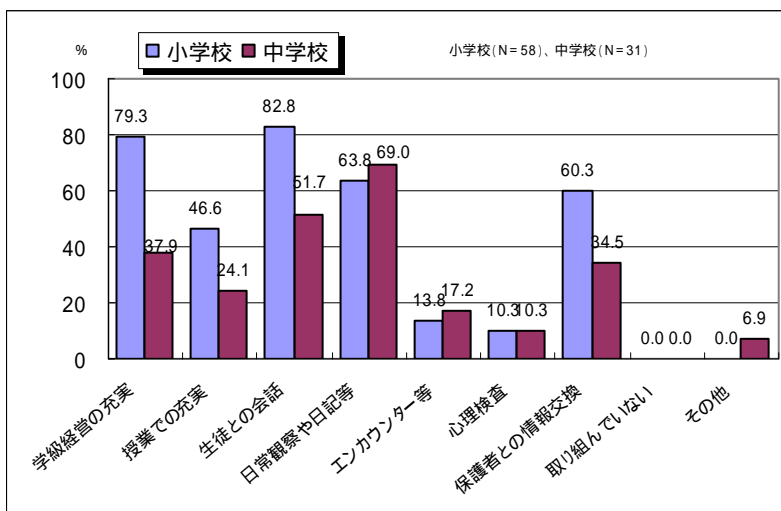
【図8】は、現在5月に行われている小中連絡会で何を話し合いたいかを示したものである。「小・中学校間での友人関係や集団生活」についての話題が求められており(小学校84.5%、中学校79.3%)、次いで「もっと詳しい小・中学校の生活指導の経過・対応」(小・中学校共に65.5%)で小・中学校とも同傾向であった。差が大きいのは、小学校教員が中学校での「小での学習」を心配しており(41.4%)、中学校教員は「保護者の情報」を求めている(62.1%)。

【図9】は、中学校1年生徒の不適応の要因を示したものである。「友人関係」(小学校79.3%、中学校69.0%)と「学習」(小学校60.3%、中学校51.7%)のほか、「教師の指導の違い」(小学校63.8%、中学校55.2%)があげられた。「教師の指導の違い」については、中学校での教科担任制のほか小学校と中学校教師の児童生徒への接し方の違いが考えられる。

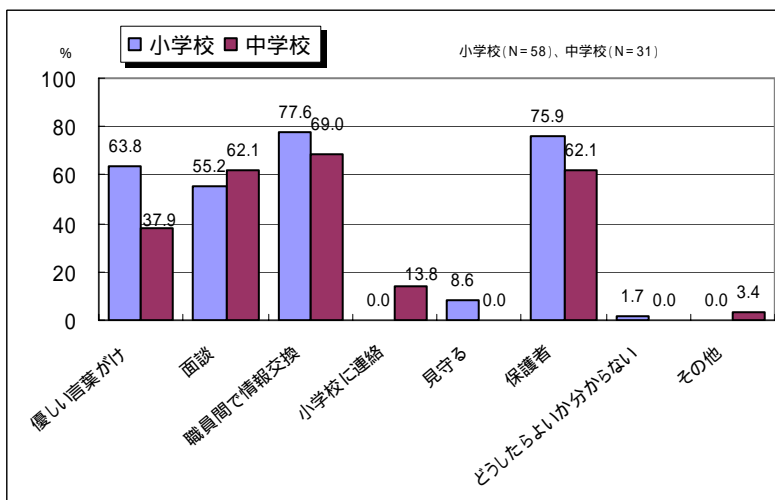
【図10】は、中学校1年の生徒に必要な資源を示したものである。「人間関係スキル」(小学校72.4%、中学校69.0%)、「相談する態度」(小・中学校とも48.3%)は、集団の中でのかかわりの際に必要な資源であると感じていることが分かる。



【図10】中学校1年生に必要な資源



【図11】児童生徒の不適応の予防取組



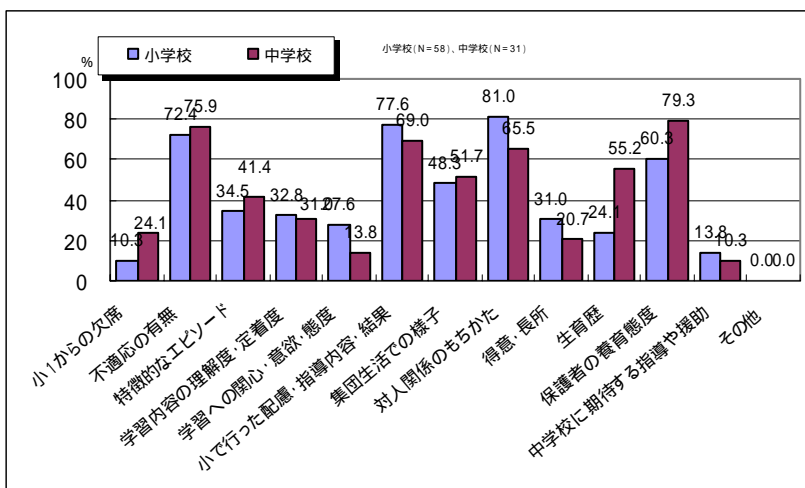
【図12】不適応への対処

また「その他」(中学校 20.7%)は、「道徳的規律をもつ」、「基本的習慣を身につける」、「中学校への心構えをもつ」などがあげられた。

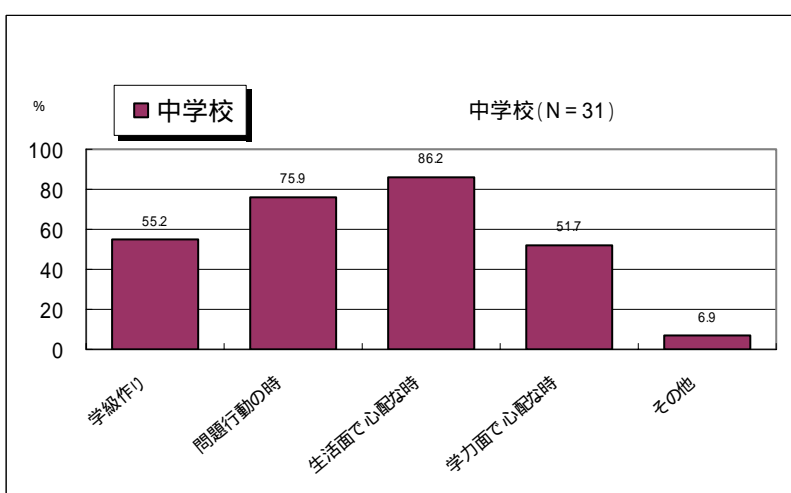
【図11】は、児童生徒の不適応の予防のためにどのような取組をしてきたかを示したものである。小学校では「学級経営の充実」(79.3%)、「児童との会話」(82.8%)が上位を占めた。これは小学校の学級担任制を特徴づけたものととらえる。一方、中学校は「日常観察や日記等」(69.0%)を多く回答していた。全体的に小学校の回答率は中学校より高く、小学校教員は学級において、児童の学校不適応に対する予防に注意深いことが分かる。

【図12】は、今まで、不適応の予防や早期適応のためにどのようなことに取り組んできたかを示したものである。「教員間で情報交換」(小学校 77.6%、中学校 69.0%)を筆頭に、小・中学校間で同傾向ととらえている。しかし、「優しい言葉かけ」(小学校 63.8%、中学校 37.9%)については、小・中学校間に大きな差があり、小学校教員は意識的に優しい言葉かけを行っていることが分かった。

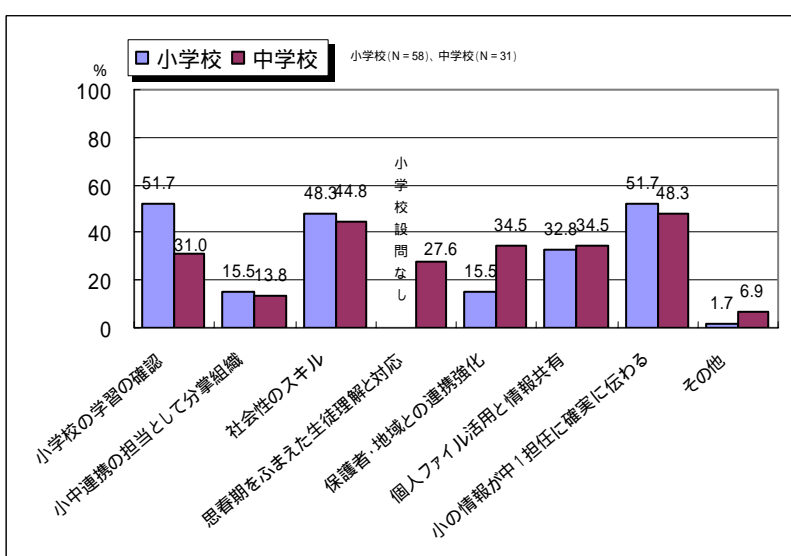
【図13】は、小学校から送りたい情報・中学校でほしい情報を示したものである。全体的に小・中学校間では同傾向ととらえているが、中学校では小学校に比べて「保護者の養育態度」(79.3%)、「生育歴」(55.2%)の回答率が高い。これらは、生徒への指導の背景には保護者の養育態度や生育歴が大きくかわるためだと思われる。【図7】



【図 13】小学校から送りたい情報・中学校でほしい情報



【図 14】学級編成以外での資料の活用場面（中学校）



【図 15】今後、校内で強化したいもの

【図 8】同様、中学校教員は小学校が知り得た保護者に関する情報を伝えてほしいことが分かる。

【図 14】は、中学校教員は学級編成以外のどのような場面で引継ぎ資料を活用しているかを示したものである。「生活面で心配な時」(86.2%)、「問題行動の時」(75.9%)、「学力面で心配な時」(51.7%)と、何かで生徒に配慮したくなかった時を中心に活用していることが分かる。また、「学級作り」の際にも活用しているなど、幅広い場面で資料を活用していることが分かる。

【図 15】は、今後、校内で強化したいものを示したものである。小・中学校共に「小学校の情報が中学校 1 年担任に確実に伝わる」(小学校 51.7%、中学校 48.3%)、「社会性のスキル」(小学校 48.3%、中学校 44.8%)をあげていた。一方、小・中学校間の違いに目を向けると、小学校では「小学校での学習の確認」(51.7%)をあげ、学習への心配は【図 9】ともかわりがある。また、中学校では「保護者・地域との連携強化」(34.5%)をあげ、学校だけではない指導・援助の必要性を感じている。

【表3】現行における引継ぎについての自由記述（一部抜粋）

小学校	中学校
<ul style="list-style-type: none"> ・文書で書けない事柄を口頭で引き継いだとき、中1担任に伝わらないと思っている。 ・必要な情報は伝えたい。 ・中学校に多くのことを伝えたいが、担任にどれだけ伝わったかは疑問である。 ・あれほど詳しく引継ぎ、話し合ったのに伝わっていないことが多く残念。中1担任と連携がうまくいっていないと感じる。 ・レッテルを貼られてしまうのではないかと懸念される。 ・例えば、小学校で登校しぶりの傾向を伝えたと中学校でそうなるも仕方がないと決めつけられそうな気がする。 ・慌ただしい時期の引継ぎで十分な時間がとれず大変である。 ・児童が、自律できる集団、自治できる集団づくりのスキルを獲得させることが必要だと思う。 ・会議や文書作成のみが対策としてとられても根本的な解決にはならない。かえって多忙化する。 ・中学校に入学するまでに身につけてほしいことを小学校に伝える。 ・中学校の教員が小学校で授業をしてみる。小6のレベルを体感してほしい。 ・小中間での授業研究会を行い、意見を述べあうべき。 ・指導方法の違いについて情報交換をしたい。 ・生徒は、指導のギャップに抵抗感があるのではないだろうか。 ・何かあった時に、気軽に電話して相談しあえるとよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報量が少ない。例えば、小学校から何も申し送りがないが中学校に来て配慮を要することもあるので、十分な話し合いが必要であると感じる。 ・3つの小学校との引継ぎを同時に行っているため、引継ぎ内容に対して時間は不足している。しかし、児童数が多く総時間は長い。 ・一度きりの引継ぎには受ける側にも限界がある。定期的に（入学1～2ヶ月後にもう一度）情報交換すると効果的だと思う。 ・小学校と中学校の「リーダー性」に合致しない面がある。問題行動や性格面のとらえも、小学校教員はできるだけ良い方に考えている傾向があるのではないかと。事実がゆがんでいることがある。 ・家庭環境や生徒の問題について言いにくそうであった。 ・小学校担任によっては、善し悪しを隠さず話す人そうでない人がいるようだ。 ・教員同士の指導観、教育観の整合を図る必要を感じる。 ・学校によって情報量が異なる。事実をしっかりと伝えて欲しい。 ・実際どうなのか、という部分での情報は少ない。 ・不安や危惧されるような状況がある際には、事前にその旨を伝えて欲しい。そのようになってからでは手の打ちようがない。 ・中学校の対応に親がついてこれないことも多い。 ・中学校は小学校よりかなり厳しくしなければ生徒はついてこないことを親に知ってほしい。 ・小中連携は必要だと思うが、今の勤務体制ではなかなか時間がとれない。

以上の実態調査から、分析と考察をまとめると次のようになる。

ア 小学校について

- (ア) 小学校教員の児童理解に関する情報収集においては、長時間児童と接することができる学級担任制を生かして、担任自らが児童の観察及び児童との会話や聞き取りから多面的に収集している。
- (イ) 保護者との連携については特に問題点は見あたらなかったことから、保護者と担任が日常的に連絡帳や電話でやりとりをしたり、家庭訪問、参観日等を積極的に活用したりして児童に関する情報を伝え合う努力をしていることがうかがえる。
- (ウ) 小・中学校間の引継ぎについては、小学校6年生担任は短時間といえども児童の特徴をとらえて中学校へ十分に伝えたと感じているが、中学校1年生担任になるとは限らない教員との引継ぎのため、内容が正確に中学校1年生担任に伝わっているかどうかについて疑問と不安を感じている。

また小学校教員は、児童の短所を中学校教員に話すと中学校教員に余計な先入観を与えること

につながってしまうのではないかと考え、なるべく肯定的な表現を使って伝えていた。そのため本質がうまく伝わったとは言い切れないという問題点が見られた。

- (I) 引継ぎ内容については、小学校担任は特に児童一人一人の学力(学習)と対人関係について話題にしていると同時に、小中連絡会では中学校での様子を知りたいと思っている。そして、そのための中学校との連携にも意欲的である。

イ 中学校について

- (ア) 中学校教員は生徒理解に関する情報収集について、困難さを感じている。教科担任制により複数の教員の目で生徒を観ることができる良さがある反面、多忙につき教員間の情報交換の時間を日常的にとることが難しいこと、生徒が思春期を迎えていてデリケートな部分については踏み込みにくさがあり、小学生ほどは直接的な働きかけや十分な聞き取りができないこと、生徒の了解を得ずに安易に保護者から事情や内容を聞けないこと等があげられる。そのため、日常観察や日記等での情報収集に頼る度合いが強まり信頼関係が築かれるまで対応を試行錯誤的にしなければならない状況がある。

- (イ) 小・中学校間の引継ぎについては、その時間と情報量の少なさ、小学校教員との児童生徒観のずれ、一度に多くの児童を引き継ぐというやり方の限界、引継ぎ内容が中学校1年生担任に確実に伝わっていないという校内体制の問題等、多くの課題をかかえている。

- (ウ) 引継ぎ内容については、中学校教員は特に対人関係と生徒本人の意識に配慮しながら指導・援助をしようとしているため、小学校から様々な情報を得たいという思いがある。しかしながら、小学校教員との児童生徒観にはずれを感じている。これは上記ア(ウ)でも述べた通り、引継ぎ時に小学校教員がなるべく肯定的な表現をしようとしていたことと繋がる。小・中学校教員は、再度、先入観として情報を取り扱うのではないことを確認し合うことが必要である。

- (I) 生徒指導において義務教育の9年間という見方をすると、小学校からの指導の連続性があったとは言い難い面もあり、しつけのし直的な考えがあるやもしれない。小・中学校区においては、中学校1年生の入学からが指導のスタートではなく、小学校6年間の延長上に中学校があることを再確認し、小中連絡会で多くの情報を交換しあって一貫した指導をすることが望まれる。中学校教員は、そのための連携について小学校教員と同様、連携に意欲的な考えである。

- (3) 「基礎的情報」の共有とそれを生かした小・中学校の連携における推進試案作成上の課題
実態調査の結果から、「基礎的情報」の共有及びその生かし方についての推進試案作成上の課題を次のようにまとめた。

ア 「基礎的情報」の共有について

< 課題1 >

小・中学校間において「基礎的情報」の共有ができるように、児童の学校生活への適応状況把握がしやすい個票を作成する必要がある。

イ 「基礎的情報」の生かし方について

< 課題2 >

引継ぎ内容が確実に中学校1年生担任に伝わり早期適応の指導・援助に役立てられるよう、小・中学校間の引継ぎの回数や引継ぎ方の工夫が必要である。

- 4 「基礎的情報」の共有とその生かし方をとって中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携についての推進試案

- (1) 推進試案作成にあたっての配慮事項

- ア 小・中学校教員間で、潜在的な問題を抱えている児童についての「基礎的情報」の共通理解を図る

イ 児童生徒の資源（リソース）や苦戦の状況、保護者の養育態度が盛り込まれている個票を作成する

ウ 個票対象児とその他の児童との引継ぎを分けて行う

エ 小中連絡会の在り方について検討する

(2) 「基礎的情報」を生かした小・中学校の連携の推進試案

推進試案作成にあたっての配慮事項に基づいて、共通理解を図るための打ち合わせ一覧（【表4】）と推進試案（【表5】）を作成した。

【表4】中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携について推進のための打ち合わせ

時期	計画	ねらい	留意点
共通理解	随時 (4月～3月)	各校と教育委員会との情報交換を行う。 各校において、連携の趣旨や進め方について管理職と各校代表者の共通理解を図る。	・教育委員会と管理職の打合せを行う。 ・管理職は、各校代表者を決める。 (小学校は6学年主任、中学校は相談部長またはコーディネーター) ・各校代表者と管理職との打合せを行う。
	各校校内研修会	全教員の共通理解を図るための研修を行う。	・各校代表者を中心に、各校内で連携の趣旨や進め方について共通理解を図るため、全教員対象の研修会を開く。
	毎月 (8月～3月)	研究協力校代表者会議	中学校区の各小・中学校代表者の研修を行い、代表者間での共通理解と意思疎通を図る。

【表5】中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携についての推進試案

時期	計画	ねらい	留意点
個票作成	(小学校) ・スクリーニング ・学年会 ・個票の作成 (中学校) ・記録用紙検討	担任によるスクリーニングと学年会の検討による、個票対象者について作成する。	・小学校各校の代表者は、書き方についての情報交換を随時行う。
引継ぎと個	小中連絡会 (引継ぎ) 個票対象者分の引継ぎ	個票対象者に絞り、「基礎的情報」を共有する。	・中学校は、既存の分掌部会を生かして日程調整を行う。(相談部が対応)
	保護者説明会での教育相談(中学校)	不安を抱える保護者への個別面談をする。	・個票対象者の理解のひとつにする。

票 の 活 用	2月 下旬	学区小学生への説明会 (中学校2学団・生徒会)	個票対象者を観察する。	・中学校代表者は事前に観察の観点を示し、確認する。 ・中2担任と養護教諭で観察する。
	2月	職員会議での共通理解 (中学校)	個票対象者入学前に教員の共通理解を図る。	・中学校代表者は日程調整をして、必要な時間を確保する。
	3月	小中連絡会 (引継ぎ) 個票対象者以外全ての児童の引継ぎ	従来 of 引継ぎ資料をもとに、全児童についての理解を図る。	・引き継ぐ内容のポイントを絞る。 ・児童の資源を必ず話題にする。
	5月	小中連絡会 (情報交換)	小学校旧6年担任と情報交換を行い、再度情報収集と指導・支援の仕方を話し合う。	・小・中学校の各担任は、個票をもとにアセスメントの修正、追加をする。
	7月	小中連絡会 (情報交換)	小学校旧6年担任と情報交換を行い、再度情報収集と指導・支援の仕方を話し合う。	・小・中学校の各担任は、個票をもとにアセスメントの修正、追加をする。
	8月～ 3月	(次回引継ぎに向けて) ・小・中学校間での反省、 検討会 ・次回の引継ぎに向けた 準備 ・引継ぎの実施	引継ぎ全般の反省を行う。 個票の修正を行う。 小中連絡会のもち方の工夫をする。	・実態に合った引継ぎとなるよう、意見をいただく。

(3) 「基礎的情報」を盛り込んだ児童個票

ア 中学校区における小・中学校は【資料1】に基づき、その目的やねらいや留意点等において、共通理解を図るものとする。

イ 個票の書き方を統一するため、【資料2】にその手順を示したものである。

ウ 手順をもとに、【資料3】のような児童個票を作成するものとする。

エ 中学校では個票対象者の引継ぎの際、小学校担任からの詳細内容を【資料4】に書き留めることとし、その後も継続的に記録を重ねる。

オ 中学校のコーディネーターは、個票対象者の引き継いだ概要を【資料5】のような一覧表に記し、中学校全教員に共通理解を図る。

個票の作成要領

岩手県立総合教育センター 教育相談室

個票作成の目的

この個票は、不登校（学校不適應）の予防のため、指導の参考のみに使用します。

引継ぎに個票を使用するねらい

小学校時までの潜在的な問題傾向を把握し、中学校での不登校（学校不適應）として顕在化することを予防するため、学区内の小学校と中学校が、緊密に連携して取り組むことに役立っています。

多様な背景をもつ不登校（学校不適應）を多面的・総合的にとらえ、児童生徒の個別の事情に応じて丁寧に対応していくことに役立っています。

中学校の教師間（特に担任）に、小学校時の情報が確実に共有されるための校内連携に役立っています。

個票作成対象となる児童生徒

<スクリーニング > ~ に該当する児童について、小6担任がスクリーニングを実施します

欠席・遅刻・早退・別室登校・登校しぶりの児童

欠席	4～5年時各学年において15日以上、もしくは6年時は12月までで10日以上
遅刻+早退	4～5年時各学年において15日以上、もしくは6年時は12月までで10日以上
別室登校・ 登校しぶり	1度でも経験があること

就学指導委員会・校内特別支援委員会・生徒指導委員会等に該当した児童
上記・以外で、担任が「特に配慮を要する」と判断した児童

<スクリーニング > に該当する児童を校内（学年）で検討します

小6担任 からの報告	学年長（学年会）	校長・教頭 の了承	個票作成
---------------	----------	--------------	------

留意点

- 1 個票に記載されている基礎的情報は、児童生徒の苦戦の状況への指導・援助に生かすためのものです。基礎的情報によって余計な先入観を持たないようにすることが大切です。
- 2 小・中学校間において、児童生徒の入学後も指導・援助について必要に応じて連絡を取り合います。
- 3 個人情報保護の観点から、プライバシーには十分配慮します。

その他

- 1 個票の保管は、中学校において3年間とします。
- 2 中学校では保管場所及び管理方法を決め管理します。管理者は教頭とします。

【資料2】個票の書き方手順

書き方 手順

スクリーニングの該当番号に をつけ

中学校記入

児童個票 1 (欠席等)・2 (就学指導等)・3 (配慮) H , , 現在 * 整理番号(

<p>上段 遅刻/早退の日数を記入します。</p> <p>下段 「欠席日数」を記入します。()内には別室・しぶりの「登校日数」</p>							記入者 担任・その他()
遅刻 / 早退	1年生 5/0	2年生 2/0	3年生 0/1	4年生 0/0	5年生 1/0	6年生 0/0	計 8/1
(別室登校・登校しぶり)	(0・0)	(0・0)	(0・0)	(0・0)	(0・0)	(0・0)	0・0
欠席日数	3 日	2 日	1 日	2 日	1 日		9 日
<p>学習・活動(顕著なものに+)</p> <p>関心・意欲・態度</p> <p>[+] 積極性 [] 持続性 [] 偏り [] 他</p> <p>定着度や得意・様子</p> <p>[] 国 [] 芸術</p> <p>取り組み</p> <p>[] 授業 [] 家庭学習 [] 発言</p> <p>[] 学校生活における基本的な生活習慣 [] 他 _____</p>			<p>対応</p> <p>どちらかに をつけます。</p> <p>担任が病休等で不在の際は、記録者の名前を記入します。</p>		<p>結果</p> <p>本人への対応の結果、どうだったかを記入します。</p> <p>良い結果だけでなく、変化なし、逆効果、等も参考になります。</p>		
<p>生活・健康(顕著なものに+)</p> <p>心身</p> <p>[] 頭痛 [] 腹痛 [] 身体不調 [] チック</p> <p>[] 医療 [] 他 [+] 問題なし</p> <p>生活状況</p> <p>[] 食事 [] 行動</p> <p>社会的反応</p> <p>対人関係</p> <p>[+] 特定の友人 [] グループ [] 学級 [] 教師</p> <p>[] 性格 [] 行動 [+] 社交性 [] 意思表示</p> <p>[] コミュニケーションのとり方 [] 感情の受け止め方</p> <p>[] 他 _____</p> <p>家庭状況 (いない場合は斜線、顕著なものに+)</p> <p>[] 父 [] 母 [] 兄弟姉妹 [] 祖父 [+] 祖母</p> <p>関係 [] 他 _____</p>			<p>+ (プラス) は、本人の資源です。</p> <p>これにより、「特定の子とは関係が結ぶことができる」など、支援の切り込み口が分かります。</p>		<p>本人に、どのような対応をしたかを、端的に記入します。</p>		
<p>こうなつてほしいと願うこと</p> <p>記入時において、「児童の指導に今、最も必要なこと」や「本人が最も苦戦していること」ととらえて記入します。</p>			<p>左記の「願い」についての、児童の1年間の大まかな変化を記入します。「4月の出会った時をゼロ」としてスタートし、主観で記入し</p>				
<p>備考</p> <p>かわりに役立つような「資源」を中心に記入します。</p>							

【資料3】児童個票（表面）

児童個票 1（欠席等）・2（就学指導等）・3（配慮）H , , 現在記入 * 整理番号()

ふりがな 氏名		男・女		小学校			記入者（どちらかに） 担任・その他（ ）	
遅刻 / 早退 (別室登校・登校しぶり)	1年生 / (.)	2年生 / (.)	3年生 / (.)	4年生 / (.)	5年生 / (.)	6年生 / (.)	合計 / (.)	
欠席日数	日	日	日	日	日	日	日	
学習・活動（顕著なものに+） 関心・意欲・態度 〔 〕積極性 〔 〕持続性 〔 〕偏り 〔 〕他_____ 定着度や得意・不得意等の様子 〔 〕国 〔 〕算 〔 〕社 〔 〕理 〔 〕体 〔 〕 芸術 〔 〕行事 〔 〕特別活動 〔 〕他_____ 取り組み方 〔 〕授業 〔 〕家庭学習 〔 〕発言 〔 〕学校生活における基本的な生活習慣 〔 〕他_____				対応		結果		
生活・健康（顕著なものに+） 心身 〔 〕頭痛 〔 〕腹痛 〔 〕身体不調 〔 〕チック 〔 〕医療 〔 〕他_____ 〔 〕問題なし 生活状況 〔 〕食事 〔 〕睡眠 〔 〕遊び方 〔 〕自立 〔 〕行動 〔 〕規範意識 〔 〕他_____				対応		結果		
社会性（顕著なものに+） 対人関係 〔 〕特定の友人 〔 〕グループ 〔 〕学級 〔 〕教師 〔 〕 性格 〔 〕行動 〔 〕社交性 〔 〕意思表示 〔 〕コミュニケーションのとり方 〔 〕感情の受け止め方 〔 〕他_____ 家庭状況（いない場合は斜線、顕著なものに+） 〔 〕父 〔 〕母 〔 〕兄弟姉妹 〔 〕祖父 〔 〕祖母 〔 〕親密さ（会話等）〔 〕養育態度 〔 〕関係機関連携 〔 〕他_____				対応		結果		
こうなってほしいと願うこと				+				
				0				
				-		4月 夏休み 冬休み 2月		
備考								

【資料3】児童個票（裏面）

<スクリーニング> _____ に該当する児童について担任が実施

欠席・遅刻・早退・別室登校の児童

欠席	4～5年時各学年において15日以上、もしくは6年時は12月までで10日以上
遅刻+早退	4～5年時各学年において15日以上、もしくは6年時は12月までで10日以上
別室登校・登校しぶり	1度でも経験があること

就学指導委員会・校内特別支援委員会・生徒指導委員会等に該当した児童

上記、以外で、担任及び学年会で、特に配慮を要すると判断した児童

A	出欠席や授業等への参加状況	ア 遅刻が多い イ 保健室へ頻回行く ウ 体育等の見学が多い エ 提出物等を出さないルーズさがある オ 基礎学力が未定着である カ 行事等に参加しないまたは参加できない キ その他
B	対人関係での特徴	ア 担任の支援がないと自分から友達の輪に入っていけない イ「いや」と断ることができない ウ トラブルが多い エ その他
C	性格・行動の特徴	ア 意志決定が遅いまたはできない(自分でなかなか物事を決めることができない) イ 内向的で意思表示をしない ウ 予想外のことに対処が困難である エ 極度に真面目 オ 理想が高すぎる カ 表情がないまたは乏しい キ 自分から相談することができない ク 気にしすぎるところがある(神経質) ケ その他
D	家族との関係	ア 家族との不和 イ 家庭の教育力が弱い ウ その他

<スクリーニング> _____ に該当する児童を校内(学年会)で検討

* 学年会でのスクリーニング・・・担任の判断だけでなく、学年会で多面的・総合的に判断する

小6担任

学年長(学年会)

校長・教頭

個票作成

【資料4】中学校用記録メモ(表)

引継ぎ 中学校用記録メモ

1(欠席等)・2(就学指導等)・3(配慮)

H , , 現在記入 * 整理番号()

ふりがな 氏名		男・女		小学校		記入者	
遅刻 / 早退 (別室登校・登校しぶり) 欠席日数	1年生 / () 日	2年生 / () 日	3年生 / () 日	4年生 / () 日	5年生 / () 日	6年生 / () 日	合計 / () 日
学習・活動(顕著なものに+) 関心・意欲・態度 []積極性[]持続性[]偏り[]他_____ 定着度や得意・不得意等の様子 []国[]算[]社[]理[]体[]芸術[]行事[]特別活動[]他_____ 取り組み方 []授業[]家庭学習[]発言[]学校生活における基本的な生活習慣[]他_____					具体的なエピソードなど ----- ----- ----- ----- -----		
生活・健康(顕著なものに+) 心身 []頭痛[]腹痛[]身体不調[]チック[]医療[]他_____[]問題なし 生活状況 []食事[]睡眠[]遊び方[]自立[]行動[]規範意識[]他_____					具体的なエピソードなど ----- ----- ----- ----- -----		
社会性(顕著なものに+) 対人関係 []特定の友人[]グループ[]学級[]教師[]性格[]行動[]社交性 []意思表示[]コミュニケーションのとり方[]感情の受け止め方[]他_____ 家庭状況(いない場合は二重線、顕著なものに+) []父[]母[]兄弟姉妹[]祖父[]祖母[]親密さ(会話等)[]養育態度 []関係機関連携[]他_____					具体的なエピソードなど ----- ----- ----- ----- -----		
こうなってほしいと願うこと		+ 0 -		4月 夏休み 冬休み 2月		備考	

【資料4】中学校用記録メモ（裏）

引継ぎ 中学校用記録メモ

1（欠席等） ・ 2（就学指導等） ・ 3（配慮）

H19, , 記入 * 整理番号()

氏名		男・女	小学校	記入者
2/28 説明会での様子	今後の方針	入学後の様子		
	学習・活動	(, ,)	(, ,)	(, ,)
	生活・健康	(, ,)	(, ,)	(, ,)
	社会性（対人・家庭）	(, ,)	(, ,)	(, ,)
小	5月	7月	備考	
中				
連				
絡				
会				

【資料5】個票対象者一覧表(記入例)

中学校 教育相談担当

番号	出身	氏名	男	1	2	3	こうなしてほしいと願うこと (個票より)	資源 (個票・聞き取りより)	本人の意欲 (アンケートより)	4月当初の方針	備考
											(学区説明会・保護者説明会等)
1	小	A					落ち着いて学習ができる	特定の友達と話す	吹奏楽でがんばりたい。	声かけ、視線を合わせる。	
2		B					前向きに行動する	図工の時間は粘り強い	野球をがんばりたい	無理をしていないか声かけをする	落ち着きに欠けた
3		C					母親からの自立、生活習慣の改善	特手の友達と話す	忘れ物をしない	メモを確認する	学習面で母はとても心配していた
4		D					前向きな気持ちで過ごす	家庭学習を進んでできる	友達をふやしたい	毎日名前を呼んで声をかける	
5	小										
6											
7											
8											
9											
10											
11											
12											
13											
14											
15	小										
16											
17											
18											
19											
20											
21											
22											
23											
24											
25	小										
26											
27											

研究の中間まとめと今後の課題

1 研究の中間まとめ

本年度の研究では、中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方について、基本構想を立案するとともに、教員の実態調査及び分析をし、それに基づいて試案を作成した。これまでの研究内容の成果について、以下のようにまとめることとする。

- (1) 中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方についての基本構想の立案
文献や先行研究等をもとに、中学校1年生における学校不適応についての未然防止の必要性を検討し、小・中学校の引継ぎに「基礎的情報」の共有とその生かし方を取り入れる意義について明らかにすることができた。
- (2) 中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の引継ぎに関する実態調査及び分析・検討
基本構想に基づいた実態調査を実施、分析・考察を行い、推進試案作成に当たっての課題をまとめることができた。
- (3) 「基礎的情報」の共有とその生かし方とおして中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の推進試案の作成

基本構想、及び推進試案作成にあたっての課題に基づき、「基礎的情報」を生かした個票の作成とそれを生かした連携の推進試案を作成することができた。

2 今後の課題

本年度の研究をふまえ推進試案に基づいて引継ぎを行うとともに、個票及びそれを生かした連携の有効性について検討し、中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方について実践的に明らかにしていきたい。

【引用文献】

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2003）,『中1不登校生徒調査（中間報告）』 - 不登校の未然防止に取り組むために - 』, pp. 4 - 6

【参考文献】

岩手県教育委員会学校教育室（2006）,『平成17年度調査』

小野昌彦（2006）,『不登校ゼロの達成』,明治図書

学校教育相談研究所（2005）,『月刊学校教育相談（3・4月号）』,ほんの森出版

「教育アンケート調査年鑑」編集委員会（2005）,『教育アンケート調査年鑑』,(株)創育社

京都市教育委員会,京都市総合教育センター（2005）,『小・中連携教育の在り方』,平成16年度研究紀要

國分康孝,久子（2004）,『構成的グループエンカウンター事典』,図書文化

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2003）,『中1不登校生徒調査（中間報告）』 - 不登校の未然防止に取り組むために - 』

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2005）,『不登校の未然防止に取り組むために - 中1不登校生徒調査から分かったこと - （パンフレット）』

小林正幸,小野昌彦（2005）,『教師のための不登校サポートマニュアル』,明治図書

小林正幸（2004）,『事例に学ぶ不登校の子への援助の実際』,金子書房

静岡県総合教育センター（2004）,『「中1ギャップ」を解消するための「中学校1年生支援」の在り方』

児童心理 2005年12月号臨時増刊（2005）,『不登校の子へのかかわり方』

品川区教育委員会(2005),『品川区小中一貫教育要領』,講談社
 品川区教育委員会(2006),『小中一貫教育全国サミット 2006』(研究紀要),小中一貫教育全国連絡
 講義会
 新潟県教育委員会(2005),『中1ギャップ解消調査研究事業報告書』
 堀洋道,吉田富士雄(2001),『心理測定尺度集』,サイエンス社
 文部科学省(2003),『不登校への対応の在り方について(通知)』
 文部科学省(2006),『児童生徒の問題行動等生徒指導等の諸問題に関する調査』
 山口豊一,石隈利紀(2005)『学校心理学が変える新しい生徒指導』,学事出版

【資料6】実態調査(小学校用)

小()

「中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方に関する研究」に係るアンケートのお願い
 岩手県立総合教育センター 教育相談室

当室では、平成18年度～19年度にかけて、児童生徒が小学校から中学校へ進学する際、継続的な指導を行うために小・中学校の教職員間でどのように連携をしていけばよいのかを研究しております。

つきましては、小・中学校の連携に関する以下のアンケートにお答えいただきたく、お願い申し上げます。

(アンケート中の「引継ぎの経験」は、現任校での引継ぎ経験ですが、経験が無い場合「他地区での引継ぎ経験」でも構いません。)

下記の項目について、該当する選択項目の記号に 印をおつけください。

- A 性別 ア 男・ イ 女
 B 年代 ア 20才代 ・ イ 30才代 ・ ウ 40才代 ・ エ 50才代以上
 C 質問

質問	質問内容	選択項目	
1	小・中学校間の、どのような場面での連携が必要だと思われますか。(複数回答可)	ア 小中連絡会で、気になる生徒の情報交換を行い綿密に話し合う イ 定期的に情報交換会を行う ウ 定期的に事例研究会や研修会を行う エ 互いの授業を見合い、授業技術の向上を図る オ 小・中学校間で、児童生徒同士の交流会を行う カ 小・中学校間の、教職員同士の親睦会を設ける キ その他()	
2	<この問いは、引継ぎの経験がある方がお答えください>	<現任校での引継ぎ経験がある場合> 引き継ぐ情報量 ア多い イ適切	<現任校での引継ぎ経験が無い場合> 引き継ぐ情報量 ア多い イ適切

	年度末に行われている引継ぎの、児童一人一人の情報量と、所要時間についてどう思いますか。(1つずつ選択)	ウ少ない 引継ぎ会にかかる時間 ア多い イ適切 ウ少ない	ウ少ない 引継ぎ会にかかる時間 ア多い イ適切 ウ少ない
3	<この問いは、引継ぎの経験がある方がお答えください> 指導要録抄本以外でどのような情報を引き継いでいますか。(複数回答可)	<現任校での引継ぎ経験がある場合> ア 成績 イ リーダー性 ウ 性格 エ 運動の様子 オ 問題行動 カ 特技 キ 保護者の様子 ク その他()	<現任校での引継ぎ経験が無い場合> ア 成績 イ リーダー性 ウ 性格 エ 運動の様子 オ 問題行動 カ 特技 キ 保護者の様子 ク その他()
4	現在の年度末の引継ぎに関して、どのようなことを感じていますか。(記述式)		
5	中1生徒の早期適応のために、指導上気になる児童について5月の「小中連絡会」で特に話し合いたいことはどのようなことですか。(複数回答可)	ア 中学校での生活指導の経過や対応 イ 中学校での学習の様子 ウ 中学校での友人関係や集団生活の様子 エ 生徒に対する中学校の先生方の見方、とらえ方 オ 小学校の情報の生かされ方 カ 保護者の情報 キ その他()	
6	中1生徒が不応感を感じやすいと言われていますが、どのようなことが要因だと思いますか。(複数回答可)	ア 学習の進め方や内容の多さに戸惑うこと イ 複数の小学校から集まるため、友人関係に大きな変化があること ウ 部活動等で、上級生との関係に緊張すること エ 自分から進んで話しかけたり誘い合ったりすることが少ないこと オ 小学校と中学校の教師の指導や対応の違いが大きいと感じること カ 中学校生活の多忙さについていけないこと キ その他()	
7	中1生徒が早期に適応するため、生徒に必要な資質はどのようなことだと思いますか。(複数回答可)	ア 授業にしっかり取り組む態度 イ 家庭での学習習慣が身に付いていること ウ 積極的に行動しようとする意欲 エ 目標をもって生活する態度 オ 新しい環境で人間関係を結べるスキル カ 困ったり悩んだりした時に、友人や先生や親等に相談する気持ちや態度 キ 部活動に真剣に向かう姿勢	

		ク その他()
8	今まで、小学生児童の不応の予防や早期適応のために、どのようなことに取り組んできましたか。(複数回答可)	ア 学級経営の充実を図ること イ 授業の充実を図ること ウ 児童との会話を多くもつようにしていること エ 日常観察や日記で、内面の変化を把握すること オ 構成的グループエンカウンターやスキルトレーニング等を行うこと カ 心理検査や面談で、児童の交友関係やつまずきを把握すること キ 保護者との面談や情報交換をすること ク 特に取り組んでいない ケ その他()
9	児童の不応状況に気づいた時、どのような対処をしていますか。(複数回答可)	ア 優しい言葉がけをし、気持ちの安定を図る イ 原因把握や解決に向けて、すぐに面談を行う ウ 職員間で情報交換を行い、共通理解を図る エ 見守っている オ 電話や家庭訪問を行い、保護者と連絡を密にする カ どうしたらよいか分からず困っている キ その他()
10	中1生徒の早期適応をさらに促進するために、小学校から送りたい情報はどのようなことですか。(複数回答可)	ア 小学校1年生からの欠席情報 イ 不応傾向の有無やその内容 ウ その生徒が分かる特徴的な具体的エピソード エ 学習内容の理解度や定着度 オ 学習に取り組む意欲や興味・関心の度合い カ 小学校で行った配慮や指導内容とその結果 キ 集団生活での様子 ク 対人関係のもち方等、本人の行動や性格の特徴 ケ 得意なこと及び長所 コ 生育歴 サ 保護者の養育態度等の情報 シ 中学校に期待する指導や援助 ス その他()
11	児童が中学校に入学し早期適応に役立つために、今後、校内で強化していきたいものはどれですか。(複数回答可)	ア 小学校での学習内容の定着度の確認や学習指導 イ 小中連携の充実を図るために、企画・運営・連絡調整等を担当する分掌組織を位置づけること ウ 社会性を培うスキルトレーニングをすること エ 保護者・地域との連携強化 オ 児童生徒の個人ファイル等を活用した校内(学年)での情報共有 カ 小学校からの引継ぎ情報が、中1担任に確実に伝えられる体制 キ その他()

12	中1生徒の早期適応を図るため、保護者に関してどのような情報を中学校に伝えることが効果的だと思いますか。(記述式)	
13	小中連絡会のほか、小・中の連携を強化していくために、小・中学校の教職員間でどのようなことを行うとよいと思いますか。具体的にお書きください。(記述式)	
14	その他、ご意見等ご自由にお書きください。	

以上です。ご協力、ありがとうございました。

【資料7】実態調査(中学校用)

中()

「中学校1年生における早期適応を図る小・中学校の連携の在り方に関する研究」に係るアンケートのお願い
岩手県立総合教育センター 教育相談室

当室では、平成18年度～19年度にかけて、児童生徒が小学校から中学校へ進学する際、継続的な指導を行うために小・中学校の教職員間でどのように連携をしていけばよいのかを研究しております。つきましては、小・中学校の連携に関する以下のアンケートにお答えいただきたく、お願い申し上げます。

(アンケート中の「引継ぎの経験」は、現任校での引継ぎ経験ですが、経験が無い場合「他地区での引継ぎ経験」でも構いません。)

下記の項目について、該当する選択項目の記号に 印をおつけください。

- A 性別 ア 男 ・ イ 女
B 年代 ア 20才代 ・ イ 30才代 ・ ウ 40才代 ・ エ 50才代以上
C 質問

質	質問内容	選択項目
1	小・中学校間の、どのような場面での連携が必要だと思われますか。(複数回答可)	ア 小中連絡会で、気になる生徒の情報交換を行い綿密に話し合う イ 定期的に情報交換会を行う ウ 定期的に事例研究会や研修会を行う エ 互いの授業を見合い、授業技術の向上を図る オ 小・中学校間で、児童生徒同士の交流会を行う カ 小・中学校間の、教職員同士の親睦会を設ける キ その他()

2	<p><この問いは、引継ぎの経験がある方がお答えください></p> <p>年度末に行われている引継ぎ会の、一人一人の情報量と、所要時間についてどう思いますか。(1つずつ選択)</p>	<p><現任校での引継ぎ経験がある場合></p> <p>引き継ぐ情報量 ア多い イ適切 ウ少ない</p> <p>引継ぎ会にかかる時間 ア多い イ適切 ウ少ない</p>	<p><現任校での引継ぎ経験が無い場合></p> <p>引き継ぐ情報量 ア多い イ適切 ウ少ない</p> <p>引継ぎ会にかかる時間 ア多い イ適切 ウ少ない</p>
3	<p><この問いは、引継ぎの経験がある方がお答えください></p> <p>指導要録抄本以外でどのような情報を引き継いでいますか。(複数回答可)</p>	<p><現任校での引継ぎ経験がある場合></p> <p>ア 成績 イ リーダー性 ウ 性格 エ 運動の様子 オ 問題行動 カ 特技 キ 保護者の様子 ク その他()</p>	<p><現任校での引継ぎ経験が無い場合></p> <p>ア 成績 イ リーダー性 ウ 性格 エ 運動の様子 オ 問題行動 カ 特技 キ 保護者の様子 ク その他()</p>
4	<p>現在の年度末の引継ぎに関してどのようなことを感じていますか。(記述式)</p>		
5	<p>小学校からの引継ぎ情報を、学級編成時以外にはどのような時に使っていますか。(複数回答可)</p>	<p>ア 学級作りをする時 イ 問題行動があった時 ウ 生活面で心配なことがあった時 エ 学力面で心配なことがあった時 オ その他()</p>	
6	<p>中1生徒の早期適応のために、指導上気になる生徒について、5月の「小中連絡会」で特に話し合いたいことはどのようなことですか。(複数回答可)</p>	<p>ア もっと詳しい小学校での生活指導の経過や対応 イ 小学校での学習についての情報 ウ 小学校での友人関係や集団生活の様子 エ 本人の性格 オ 中学校での様子への小学校の先生の見方や意見 カ 保護者の情報 キ その他()</p>	
7	<p>中1生徒が不応感をもちやすいと言われていますが、どのようなことが要因だと思いますか。(複数回答可)</p>	<p>ア 学習の進め方や内容の多さに戸惑うこと イ 複数の小学校から集まるため、友人関係に大きな変化があること ウ 部活動等で上級生との関係に緊張すること エ 自分から進んで話しかけたり誘い合ったりすることが少ないこと オ 小学校と中学校の教師の指導や対応の違いが大きいと感じること</p>	

		カ 中学校生活の多忙さについていけないこと キ その他 ()
8	中1生徒が早期に適応するため、生徒に必要な資質はどのようなことだと思いますか。(複数回答可)	ア 授業にしっかり取り組む態度 イ 家庭での学習習慣が身に付いていること ウ 積極的に行動しようとする意欲 エ 目標をもって生活する態度 オ 新しい環境で人間関係を結べるスキル カ 困ったり悩んだりした時に、友人や先生や親等に相談する気持ちや態度 キ 部活動に真剣に向かう姿勢 ク その他 ()
9	今まで、中1生徒の不適応の予防や早期適応のために、どのようなことに取り組んできましたか。(複数回答可)	ア 学級経営の充実を図ること イ 授業での充実を図ること ウ 生徒との会話を多くもつようになっていること エ 日常観察や「生活の記録」で内面の変化を把握すること オ 構成的グループエンカウンターやスキルトレーニング等を行うこと カ 心理検査や面談で、生徒の交友関係やつまずきを把握すること キ 保護者との面談や情報交換をすること ク 特に取り組んでいない ケ その他 ()
10	中1生徒の不適応状況に気づいた時、どのような対処をしていますか。(複数回答可)	ア 優しい言葉がけをし、気持ちの安定を図る イ 原因把握や解決に向けて、すぐに面談を行う ウ 職員間で情報交換を行い、共通理解を図る エ 小学校に連絡をし、情報やアドバイスをもらう オ 見守っている カ 電話や家庭訪問を行い、保護者と連絡を密にする キ どうしたらよいか分からず困っている ク その他 ()
11	中1生徒の早期適応をさらに促進するために、小学校からほしい情報はどのようなことですか。(複数回答可)	ア 小学校1年生からの欠席情報 イ 不適応傾向の有無やその内容 ウ その生徒が分かる特徴的な具体的エピソード エ 学習内容の理解度や定着度 オ 学習に取り組む意欲や興味・関心の度合い カ 小学校で行った配慮や指導内容とその結果 キ 集団生活での様子 ク 対人関係の持ち方等、本人の行動や性格の特徴 ケ 得意なこと及び長所 コ 生育歴 サ 保護者の養育態度等の情報

		シ 中学校に期待する指導や援助 ス その他（ ）
12	中1生徒の早期適応のための対応について、今後、校内で強化していきたいものはどれですか。(複数回答可)	ア 小学校での学習内容の定着度の確認や学習指導 イ 小中連携の充実を図るために、企画・運営・連絡調整等を担当する分掌組織を位置づけること ウ 社会性を培うスキルトレーニングをすること エ 思春期の特性をふまえた生徒理解と対応 オ 保護者・地域との連携強化 カ 児童生徒の個人ファイル等を活用した校内(学年)での情報共有 キ 小学校からの引継ぎ情報が、中1担任に確実に伝えられる体制 ク その他（ ）
13	中1生徒の早期適応を図るため、保護者に関してどのような情報を小学校から受けることが効果的だと思いますか。(記述式)	
14	小中連絡会のほか、小・中の連携を強化していくために、小・中学校の教職員間で具体的にどのようなことを行うとよいと思いますか。(記述式)	
15	その他、ご意見等ご自由にお書きください。	

以上です。ご協力、ありがとうございました。